県大 jiman

2020 FEBRUARY
026
滋賀県立大学広報誌

滋賀県大イベントカレンダー

2月
10日（月）～ 14日（金）
後期定期試験
15日（土）～ 17日（月）
地域活動実践ターム
19日（水）
第 14 回就職セミナー（直前対策セミナー）
25日（火）
一般選抜試験（前期）

3月
2日（月）～ 5日（木）
学内企業研究会
12日（木）
一般選抜試験（後期）
20日（金 祝）
学位記授与式

4月
6日（月）
オリエンテーション①
7日（火）
午前：入学式
午後：オリエンテーション②
7日（火）～ 15日（水）
前期履修登録期間
8日（水）
前期授業開始
11日（土）
新入生 TOEIC テスト
24日（金）～ 5月 1日（金）
前期履修登録確認・取消期間
29日（水 祝）
祝日授業日（水曜日の通常授業）

6月
6日（土）
開学記念日
13日（土）
京滋公立大学総合競技大会（京滋戦）
中旬
大学祭「湖風夏祭」

7月
18日（土）、19日（日）
オープンキャンパス

▽県大 jiman26 号についてご意見をお寄せください
（下記QRコードを読み取ると、Webからアンケートの回答ができます）

The University of Shiga Prefecture

特集 1　県大のすごいひと　Vol.3
特集 2　突撃!! jimanな先生たち
ジョン リピー教授、白井 宏昌教授、島田 和久准教授
After School Report　びわこまち ～舞台は地球、文化の壁を超えて～
コラム　ちょっとはしやすめ ～編集スタッフのゆるコラム～

滋賀県立大学

県大 jiman

第 26 号のテーマは「STAGE」です。
舞台袖にて出番待ち、高まる不安と緊張感。
一歩先は、光り輝く眩しい世界。
今回の県大 jiman は、そのような気持ちを乗り越えて STAGE に立っている人や、新たな STAGE で頑張っている人にスポットライトを当てました。あなたもその一歩があれば、キラキラ輝く自分にきっと出会えるはずです。

CONTENTS

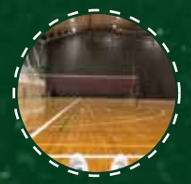
特集

03　県大のすごい人　Vol.3
07　突撃 !!　jiman な先生たち
　ジョン　リピー 教授、白井 宏昌 教授
　島田 和久 准教授

県大 REPORT

11　After School Report: びわこまち
12　ちょっとはしやすめ
　～編集スタッフのゆるコラム～
13　滋賀県立大学における SDGs の取組
14　Information

編集後記　テーマ：ここが私の「STAGE」



バドミントンコートに入ると、
本当の自分が見つけられます！
人間文化学研究科
生活文化学専攻　2 年　孫　吉琛

5 年携わる県大 jiman で培った
文章力が強みです。
工学研究科
機械システム工学専攻　1 年　吉川 知秀

いかにして朝の電車に間に合うか。
起きた時から勝負が始まる。
地域文化学科　3 年　高木 咲歩

駆け抜けた２日間。
青春全部詰め込みました。
国際コミュニケーション学科
3 年　西村 ののか

建築デザインをしています。
環境建築デザイン学科
3 年　山田 海理

「ＳＴＡＧＥ」で喋ること。（緊張はします）
環境政策・計画学科　2 年　野口 将太郎

絵を描くのが好き。
いつか得意だと言えるようになる！
地域文化学科　1 年　小林 すみれ

鍵盤とペンさえあれば、私は自由。
人間関係学科　1 年　谷垣 安由史

ここが原点であり、
現在の働くステージ。
事務局　岡 一喜

県大 jiman の学生スタッフを
サポートするのが最高の楽しみです。
事務局　馬渕 優子

自分の場所は自分で作るよう
心がけています。
OB　高杉 昭吾

学生広報スタッフ大募集！

広報誌作成グループでは、県大 jiman の作成に参加してくれる
学生を募集しています。
私たちと一緒に、県大の素敵な「jiman」をしてみませんか。
デザインや編集の専門知識が無くても大丈夫です。
外部のデザイナーさんや編集者を招いて勉強会なども行う予定ですので、
興味のある方は、気軽にお問い合わせください。
Mail:kendaijiman.tw@gmail.com
Twitter:@kendaijiman

年 2 回発行
夏号 7 月上旬
冬号 2 月上旬

滋賀県立大学広報誌「県大 jiman」第 26 号
発行｜滋賀県立大学広報委員会
編集｜広報誌作成グループ
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
TEL｜0749-28-8200　FAX｜0749-28-8470
E-mail｜keiei_kikaku@office.usp.ac.jp
発行日｜2020 年 2 月
www.usp.ac.jp
紙面デザイン：学生スタッフ
写真：写真部

正木美帆さん
環境科学部環境政策・計画学科４年生

Try&Errorで さらなる高みへ

今号１人目のすごい人はNPO参加とオーストラリアへの留学、2つの大きなトライを終えて新たなステージに向かっている正木美帆さん。挫折を経験しても、その経験をばねにしてより良い自分になろうとする姿勢が印象的でした。

WHY 英語で取材ができない！ インドで味わった悔しさ

大学に入学したとき、大学4年間の目標を決めました。それは、大学生の自由を存分に使って自分がやりたいことを全部やって、その中から本当にやりたい仕事を見つけようというものでした。また、環境問題に関わりたいという思いが入学当初からありました。その目標と関心に向かって大学3年間で様々なことをやりました。

2年生で県大jimanの編集スタッフになったこともその1つです。そして県大jimanで活動していく中で、最初の目的だった編集よりも、取材が楽しくなってきて。取材についてもっと勉強したくて、途上国や国際協力・開発をテーマとするGANASというNPOメディアの、グローバルライター講座を受講しました。

3年生の夏に、そのNPOがやっていた、途上国に取材に行くスタディツアーに参加してインドへ行きました。ただ、当時私は英語が全くできなかったので、英語での取材にすごく苦労しました。日本語だったら、取材の中で面白いなと思ったところに突っ込んでいくことができるのに、それができずに悔しい思いをしました。その悔しい思いが留学に行くきっかけの1つになったと思います。

3年生の冬、周りの人たちが就活を始めた時期に、留学に行くことを決めました。それはNPOでの経験を受けて、英語を使って世界の人とつながりながら仕事がしたい、そのためにも英語ができないといけないという思いからです。また、スタディツアーでの悔しさを残したまま就活したくないという思いもあったからです。留学先はオーストラリアの都市、ブリスベンのILSCという語学学校です。留学に行く際にも目標を決めました。英語力とディベート力をつけること、卒論のテーマだったツバルの気候変動問題について理解を深めることでした。

CHANGE 頼れる人のいない中で 身に着けた目線

留学は、最初の計画通りに進んだかと言われたら、そうとは言えないことも多かったです。時間はあったけど、つてがゼロで、語学力もないし、全然思い通りに動けなかったですね。立てた計画がうまくいかなかったのはこれが初めてで。ツバルについての卒業論文も、その1つに集中するんじゃなくて、もっとほかのことも見たいっていう自分の意思もあって、うまく形にできなかったです。

ただ留学の目標だった英語力やディベート力はつけられたから、この留学は失敗ではなかったなと思っています。具体的に何かをしたというわけではなかったけど。

あと、いろいろな国の人たちの中で、自分と全く違う観点を身に着けることができたこと、英語はあくまでツールであって、異文化理解の方がよっぽど重要だなと気づけたことも収穫でした。

また、オーストラリアの環境意識の高さを知ることができたことも大きかったです。オーストラリアの環境についての実情を知ることができたことが、自分の次の目標を決める大きな要因になりました。

NEXT STAGE 見つかった「人生のゴール」

オーストラリアの留学を通して、今まで出会ってきた自然などの美しいものを守るという自分のゴールが明確になりました。それを達成するための武器をそろえるため、大学院に進学しようと思っています。

患者さんとの架け橋に
～ドルフィンセラピストへの道～

今号2人目のすごい人は、ドルフィンセラピストを目指す加納由津子さんです。
イルカの癒し効果で人を元気にするドルフィンセラピー。イルカの飼育をしたり、患者さんとの面談をしたりします。
ドルフィンセラピーを行っている施設が2か所しかない日本を飛び出して、本場・オーストラリアで頑張る「すごい人」には、大きな夢がありました。

加納由津子さん
人間文化学部国際コミュニケーション学科3年生
オーストラリア・シドニー工科大学に留学中

WHY ドルフィンセラピストを目指すきっかけは、1本の映画

小さいころからイルカが好きで、もともとはショーをするトレーナーになりたいと思っていました。ドルフィンセラピーのことを知ったのは、中学生の時に観た『少年とイルカ』という映画です。トレーナー以外でイルカと関われる仕事があるんやと知ってびっくりしました。

ドルフィンセラピストは、患者さんとイルカの架け橋となる人です。セラピーを通して、患者さんの病気を治すことはできないけど、患者さんの生活の質を上げられることがすごいところです。イルカと共に過ごすことによって、治療に前向きに取り組む動機ができるそうです。そんな力がイルカにはある。イルカは可愛いだけじゃないんです。

CHANGE オーストラリアで1日1ドルフィン生活

Dolphin Discovery Centreというところで研修を行っています。そこでは、毎朝必ず野生のイルカが数頭やってきます。少ししかエサをやっていないので、それが目的ではないとのことです。おそらく、人に興味があり、また浅瀬で天敵もいないから来るのだと思います。ドルフィンセラピーの予約が入っている日は、患者さんのウエットスーツを着るお手伝いなどをして、セラピーの様子を見学させてもらっています。日本と違って、セラピーを共にするイルカは野生ですが、とてもおとなしく、攻撃などはしてきません。お子さんや、自閉症の方など、患者さんがとても楽しんでいる様子をみて「やってよかった！」と思います。

ドルフィンセラピーの進んでいるオーストラリアのセラピストはどのような人なのだろうと思いましたが、作業療法士の資格を持ち、イルカにも慣れている人ということでした。そこは意外と日本と同じで、思っていたのと違いました。

イルカを見に来る観光客にイルカの説明をしています。もちろん英語ですが、めっちゃカンペを見ています(笑)

NEXT STAGE 日本のドルフィンセラピーの先駆者になる！

今の目標はまず、英語をどんどん勉強すること。いろんな人と話して、いろんなことを聞き出せるようになりたいです。そして、作業療法士の資格を取るために心理学の勉強もしたいと思います。セラピストにも患者さんにも話を聞いて、分からないことを詳しく調べたいです。失敗するかもしれん。でもその失敗も経験になるように、根気よく粘り強くしつこく頑張りたいです。限られた時間を大切に、1日1日頑張っていきたいです。

日本は世界で一番水族館が多い国だといわれています。イルカがいる水族館もたくさんあります。そこでドルフィンセラピーをできる現場をつくって、日本に広めていきたいです。そしてドルフィンセラピストを育成できるシステムも作りたいです。

患者さんのお母さんと。この方はセラピーのためにシンガポールからやって来た方でした。

担当スタッフ： 西村ののか　小林すみれ

突撃!!
jimanな先生たち

**いつもは1人の先生に取材を行う
突撃!!jimanな先生。今回は今までになかった試みとして、
学部が異なる先生方をお呼びして、対談していただくことにしました。
初めてとなる今回は、本号のテーマである「STAGE」にちなんで、
海外で活躍した経験がある先生、海外出身の先生に
集まっていただきました。**

ジョン リピー 教授 × 白井 宏昌 教授 × 島田 和久 准教授

先生方の経歴と研究内容

ジョン リピー John Rippey

2013 年 4 月、滋賀県立大学人間文化学部国際コミュニケーション学科教授に着任。研究内容は英語による詩の創作、英語教育でのクリエイティブ・ライティングについて行っている。学内では、英語教育や国際交流に関する活動も行っている。留学生には、自身も興味がある俳句について教えることがある。

白井 宏昌 Shirai Hiromasa

2015 年 7 月、滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科准教授に着任。2018 年 4 月からは教授に昇任。研究内容は設計や建築デザインのほかに、建築とツーリズムに関する研究、オリンピックと都市に関する研究などがある。また、彦根市や多賀町において空き家再生の取組も行っている。

島田 和久 Shimada Kazuhisa

2017 年 4 月、滋賀県立大学全学共通教育推進機構特任准教授に着任。研究内容は国際政治のほかに、留学生とともに地域で活動している地域資源の発掘プロジェクトの推進、東日本大震災の被災地の地域レジリエンスについての研究などがある。学内では、大学同士の交流や留学に関する取組も行っている。

さまざまな STAGE で活躍される先生たち

白井 僕は大学院を卒業して日本で 5 年間働いたあと、文化庁が芸術家を海外に派遣するプログラムでオランダに行き建築家として働きました。その後、ロンドンスクールオブエコノミックスの博士課程に入りました。大学で学びながら、ロンドンオリンピックの会場の設営をしました。2010 年に帰国した後は、北京や台湾で設計の仕事をしました。

島田 ロンドンではどんなことを勉強されましたか？

白井 都市問題について勉強しました。デザインや政治、経済などいろんな方面から都市を語るプログラムに参加しました。

リピー先生が日本に来たきっかけ

リピー 私はアメリカのカンザスシティで育ちました。英語の文学が好きで、アメリカの歴史を専攻していました。別にアメリカに不満は感じていませんでしたが、大学を卒業したころに「違う文化を経験したい。旅行に行きたい」と好奇心がわきました。「違う文化の人はどのように生きているんだろう？」それを知りたい、体験したいという気持ちがアメリカを出たきっかけです。

日本と海外の文化の違い

リピー 日本とアメリカの違いを感じるのは、コミュニケーションのとり方ですね。アメリカ人は家族以外の人にもストレートに個人的なことも話しますが、日本人は自分の気持ちを相手に伝えるとき、とても慎重になりますよね。付き合いを深めていくうちに、徐々に相手との関係を築いていくので、丁寧で思いやりがある感じがします。でも、ずっとアメリカで育ってきたので、それに慣れるのに少し時間がかかりました。「えー、何で話さないの？はっきり言えばいいのに」って。でも、状況によっては慎重に人間関係をつくっていくのもいいかなと思いますね。

白井 今の先生のお話に関連すると思うのですが、オランダ人も「良い」「悪い」をはっきり言います。オランダの文化って、ダメ出しをすごくするんですよ。何かを進めるとき、自分の思ったことをストレートに言うのが良いことだとみんな思ってる。でも、その後イギリスに行ったときは全く違いました。日本人と似ていて、言いづらいことはオブラートに包んで話すんです。

島田 海外にいると、自分が日本人だということを強く自覚しますね。実は日本のことをよく分かっていないところとか。道を歩いてるときに水をひっかけられたり、卵をぶつけられたこともありました。彼らはそこまで真剣に考えてはいないようですが、日本人としてはとても屈辱的でした。しかし、それが異文化にいるということだと思いました。改めて、日本人であることを気づくきっかけにもなりました。

日本と海外の教育の違い

島田 いちばん大きな違いは、日本の教育は生徒が受け身で、海外は教員と生徒が互いに自分の意見を発信するところですね。先生はひたすら話し続けて、生徒たちはそれを聞いて書くのが日本のやり方ですよね。でも、僕がオーストラリアに留学した時は、先生も生徒も関係なくフラットに話をしていたので、全然違うなと感じました。そのような経験を踏まえ、県大では、先生と生徒が双方向に意見を伝えあえるように心がけて授業をしています。

リピー 勉強に対して、西洋は自分ひとりの力で良い成績を残さなきゃいけないという感覚がより強い気がします。それと対照的に、日本はグループで取り組むことが大事にされています。みんなと一緒にステップアップすることも、失敗したときにしっかり自分で責任をとれる力をつけることも両方大事だと思います。それぞれの国ごとに教育の哲学は異なるかもしれませんが。

白井 僕が思うのは、ヨーロッパなどの英語圏の人たちは、まず結論を先に言うんですよね。先に意思表示をしてから、その後に理由や根拠を話すんです。日本人ってなかなか最初に結論言わないじゃないですか。「A があって、その次に B があって、最終的に X です」といったように。でも、僕は最初に結論を言うのがいいなって思うんです。学生に「設計案を説明しなさい」って言うと、前置きばかりすごく長く話す子が多いです。「結局君は何をやりたいの？」って思っちゃう。建築は結構こういうことが起こりがちだから、最初にいちばん大事な結論や自分の意思を言って、その後にいろいろな要素を肉付けしていくほうが有効かな、とよく感じます。

島田 今、県大には、「何かにチャレンジをしたい！」という意欲的な留学生たちがいっぱいいます。そういう子たちを日本人の学生が見て、刺激を受けるというのはすごくいいことです。海外では同世代の学生たちが、こういう気持ちをもっているんだということを県大生も知って、自分も頑張ろうと思うこと。そういうのが大事だなとは思いますね。

リピー 今の先生の発言から、海外へ留学するのはとても貴重な経験だと気づかされますね。

島田 そうですね。「私はこの大学を卒業しました」ということじゃなくて、「私はこんなことができます」と言える部分を作りあげていく。そんなことが大切ですよね。

白井 そうですよね。あと、その人のスキルもあるんでしょうけど、いかにネットワークを築けるかということも大きいと思います。最近、人生 100 年時代とよく言われていますよね。これからライフステージのあり方がだいぶ変わっていくと思うのですが、どれだけ人脈をもっているかが重要だと思います。大学時代ではスキルを磨くと同時に、ネットワークの作り方を覚えていくことも、ぜひみなさんに頑張ってほしいです。

県大生へのメッセージ

島田 学生には、グローバルな視点をもってほしいです。日本の中だけで快適に生きていけるけど、慣れない環境に飛び込んでみることも重要だと思います。慣れない環境の中でどうやって自分らしさを出していけるか、新しい自分に気づけるか、そういうところがとても大事だと思います。新しい自分を見つけることに加えて、壁を乗り越えることで自分に自信がつきます。日本にいてもできることかもしれないけど、海外に行って敢えて自分を快適な環境から引き出していくことが大切だと思います。

リピー この質問に答えるために、１週間前からずっと考えていました。学生のみなさんには、自分の好きなものに一生懸命取り組んでほしいです。友達づくり、クラブ活動、勉強、留学など。何かに一生懸命打ち込んだら、きっと道が開けてきます。進路など現実的なことはあまり気にせずに、自分が面白いと思うものにすべてを捧げてください。留学しても、友達を作るのはなかなか難しいです。そこにあるコミュニティに入るのに苦労します。でも、県大は、自然に囲まれていて場所もいいし、教育を大切にしています。人が育つ大学なので、学生も教員も国籍関係なく、つながりをつくっていくことができると思います。私は外国人ですが、県大はとても過ごしやすい環境です。外国人だからといって制限されることがないです。自然体でいられます。

白井 学生には、想像もしていなかった人やモノ、コトを経験して視野を広げてほしいです。僕の経験から言うと、建築の模型を作るとき、日本の建築だと、床、壁、屋根を順番に作って丁寧に仕上げていきます。でも、オランダでは、いきなり発砲スチロールの塊をライターで燃やして作り始めた人がいたんです。そんな作り方は全く思いつかなかったし、こんなことをやる人がいるんだなって驚きました。自分の知らないこと、思いつかなかったことを経験して、自分の価値観を広げることって、すごく大事ですよね。あと、英語ができないことにおびえないでほしいですね。

島田 本当にそう思います。

白井 僕、本当に英語ができなかったんですよ（笑）。「お前の席はどこだ」って聞かれて「俺の出身は東京だ」って間違えるくらいでした。だけど、しばらくいるとできるようになるから。正しいかどうかは気にせずに、コミュニケーションをとりたいとか、自分はここにいたいっていう気持ちがあれば、なんとなく生き延びられますよね。

島田 僕もその通りだと思います。語学力とコミュニケーション能力は全然違うんですよね。だから、語学ができなくたって、たくさん友達をつくれます。

白井 留学っていうと、英語のハードルが高いと身構えがちじゃないですか。でも、それはあまり気にしない方がいいと思います。

キーワードは「つながり」

白井 時には、努力をしないことも大事だと思います。僕は自分の意志はもっていましたが、その時の流れに乗っていろんな国に行きました。振り返ると、どの国の仕事もしっかりつながりがあったのだなあと気づきました。

リピー 島田先生は、アジアやアメリカ、オーストラリアなどいろいろな国にお友達がいらっしゃいますよね。

島田 そうですね。例えば、以前関わったイギリスの大学協定校の人とのつながりが、県大でまた新たなつながりをつくりました。そして、やはり人と人とのつながりは、直接お互いの顔を見て話すことがすごく大事です。

リピー 学生も同じです。何かやりたいことを見つけて、１歩踏み出したら良いことが起こるかも。最初のスタートが次へとつながる、グローバル化ってそういうことだと思うんです。

島田 僕はよく学生に、留学を山登りに例えて話をします。頂上に行くまでは、登ったところまでの風景しか見えない。しかし、あまり眺めのよくない道を登り続けて頂上に立つと、向こう側に大きく広がる景色が見える。そうすると、その広い風景の中で次に行きたいところが見つかる。

リピー 島田先生は、ハイキングが趣味ですからね（笑）。

県大がめざす、新たな STAGE

白井 県大は過ごしやすい環境ですね。

リピー いろいろな国からの留学生や教員が集まっているので、客観的に自分を見つめなおすこともできますね。他の大学ではできないと思います。

白井 確かに、特殊な環境ですね。

島田 僕は、海外の大学で県大を売り込むときには、「学生と先生の距離がとても近いからいろんなケアがしてもらえるとってもいい大学ですよ」ってアピールします。あとは、「自然がいっぱいで、カモもいるよ！」「とってもユニークな形の建物があるキャンパスだよ」って、いつも言ってます（笑）それはやっぱり県大のすごくいいところだと思うし、これからも大切にしてもらいたいところです。大きな大学では、学生と先生の距離が遠いことが多いですから。

リピー その雰囲気が、国際交流にもつながっているかもしれないですね。学生と先生がお互いをしっかり見て、尊敬しあって、つながっている。

白井 キャンパスに外国の方がいても、留学生と国内の学生の差がないのが理想ですね。僕が通ったロンドンの大学は、留学生が多かったけれど誰もそれを気にしなかった。まだ、県大は留学生と日本人学生の垣根があるように感じます。もうちょっと融合できたらいいなと思います。この大学は、地域と近いのが特殊ですよね。例えば、地域の課題をどう解決すべきか授業で話しあったりします。その時に、外国の方も一緒に参加できたらいいですね。僕らと少し視点や考え方が違うので、そういう意味では、大学から発信できる知の幅が、留学生の力を借りてもっと広がるといいのになあと思います。

島田 今まさに僕はそれに取組んでいます。留学生目線で地域のいいところを発信する活動です。長浜、甲賀、湖南、近江八幡で留学生と活動をしています。里山に行ったり、街中で観光資源を発掘したりします。留学生は視点が全然違っていて面白いです。

リピー そうですね。様々な地域や国を超えて、自由に行動できる学生が増えたら、もっと大学のグローバル化が進むと思います。

島田 自分からどんどん外に出て、知らない人に会っていろんなことを吸収していくことが自分の将来や、新しい世界・選択肢につながっていくと思います。

リピー でも、自分から動くことはなかなか難しい。知らない人に違う言語で話しかけるのは、勇気がいることですよね。日本人学生と留学生が何か接点を作れるような出会い方を提供できるようにしたいです。

島田 県大生が大きく変われるきっかけを作っていけたらいいですね。

リピー ドキドキするけど、緊張を捨てて、声をかけてみよう！

担当スタッフ：吉川知秀、正木美帆、髙木咲歩、西村ののか、山田海理、谷垣安由史

After School Report

びわこまち

ここ滋賀県立大学を STAGE に、
留学生と交流できるサークル「びわこまち」。
今回はその代表、松木優奈さんにお話を伺いました。

国際コミュニケーション学科
１年生

松木優奈さん

どのような活動をしていますか？

国際交流を目的としたイベントを月1・2回行っています。留学生向けの説明会やキャンパスツアー、ウェルカムパーティーやお別れパーティーなどをやります。また、スイカ割りやハロウィンパーティー、紅葉狩りといった日本の文化と外国の文化を楽しめる季節のイベントもやっています。

1年生中心というのは、珍しいですね

びわこまちは国際コミュニケーション学科の学生が多いのですが、夏に多くの2年生の方が留学に行ってしまうので、今は1年生が主となって活動しています。留学しない2年生や留学から帰ってきた3年生、他の学部・学科の人たちも参加しています。留学生の留学期間も半期だけの人もいれば3年くらいの人もいるといったようにばらばらです。だから入れ替わりが激しく、参加者の顔ぶれは頻繁に変わります。

活動を通して思ったことや印象に残ったことはありますか？

意外と日本語でもわかってくれるし、がんばって頭の中で考えて英語を話すというよりは、笑顔でやり取りするほうがみんな盛り上がります。拙い英語でもわかろうとしてくれるのも、うれしいです。一方で、いろんな感覚の人がいるので、苦労することもあります。

びわこまちさんの強みやアピールポイントを教えてください

全くではないけれど、外国人と日本人との壁や年齢を気にすることなく、ただただ世間話ができるのはとても素敵だと思います。それも遠慮がなく喋れるっていうのがすごいなぁと。おかげで留学生の出身国の食文化をはじめ、いろんな文化をいっぱい知ることができます。結構留学生は留学生だけで固まっているのをキャンパスでも見かけるかもしれませんが、びわこまちでの活動をきっかけに話しかけてくれます。そういった意味で、やはり留学生と関われるのは一番大きいポイントかなと思います。

最後に読んでくださる皆さんにメッセージをお願いします！

普段関わることの少ない留学生と友達になって世間話ができるサークルです！国際コミュニケーション学科の学生が多いですが、他の学科の人も積極的に参加してくれています。インスタグラムのアカウントで楽しさをアピールしているので、興味ある方はぜひのぞいてみてください。

Instagram➡ BIWAKOMACHI

ＭＴ　不定期（LINEで行うことが多い）
活動　国際交流イベントの企画・実施
場所　A1棟　1階
国際コミュニケーション学科の自習室
人数　30名から50名程度

担当スタッフ：野口将太郎、谷垣安由史

ちょっとはしやすめ

～編集スタッフのゆるコラム～

今回から新しく始まった「**ちょっとはしやすめ**」。
編集スタッフが自由に、ゆるっと記事を書いていきます。
記念すべき第１回目は、新入生小林が編集スタッフを紹介します。
「**県大 jiman に入ったきっかけ**」についてインタビューしました！

吉川知秀（大学院１年・左）
器が大きなリーダー的存在、よっしーさん。なんと活動歴５年目！

野口将太郎（２年・中）
適当そうにふるまっているけど
きっと真面目なまさたろうさん。
県大 jiman の次期エースです。

谷垣安由史（１年・右）
臆さずにどんな意見も言えるところがすごいな、あーちゃん。
「新聞部のぶんちゃん」という２つ目の名をもつ。

小林すみれ（１年・左）
おっとりした癒し系、すみちゃん。
彼女の文章力を私も見習いたいなあ。
（先輩より）

孫吉琛（大学院２年・中）
はにかんだ笑顔が素敵な孫さん。
いつも独創的なアイデアで私たちを
楽しませてくれます。

髙木咲歩（３年・右）
いつも手作りお弁当持参系女子、
さほさん。言葉が好き！という気持ちが
県大 jiman への原動力。

山田海理（３年・左）
クールに見えて実は面白い、かいりさん。
文章と建築、全く違う２つの分野で
デザインについて勉強中です。

西村ののか（３年・右）
笑顔がまぶしくて、まるで太陽みたいな
のんちゃん。元新聞部の血が騒いだのは、
ふと目にした県大 jiman に誤字があった
から。気をつけます…。

県大 jiman は、個性豊かなスタッフがいっぱい！
次号のコラムも、ぜひご期待ください♪

担当スタッフ：髙木咲歩、小林すみれ

滋賀県立大学における SDGs の取組

ＳＤＧｓの達成に向けた取組を推進しています

本学は、ＳＤＧｓの達成に向けた取組の推進拠点となることを目指し、2018 年 6 月に学長と学生が共同で「滋賀県立大学ＳＤＧｓ宣言」を行いました。また、2019 年 6 月には、教育、研究、地域貢献の各分野にわたる全学的な取組を推進するための「滋賀県立大学ＳＤＧｓ取組方針」を制定しました。

ＳＤＧｓの達成に向けて、様々な事業に取り組んでいます。

キャンパスＳＤＧｓびわ湖大会を開催しました

2019 年 11 月 16 日（土）に交流センターをはじめとした学内を会場として、「キャンパスＳＤＧｓびわ湖大会～地域と共に育む新しい価値の創造～」を開催しました。

当日は、基調講演のほか、パネルディスカッション、ポスターセッション・動画コンテスト、ワークショップ等を行い、県内外から 412 名の方々に御参加いただきました。

基調講演「ＳＤＧｓをアクションしよう！」では、独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）職員の高野 翔さんを講師にお招きし、高野さんが地元の福井で実践するまちづくり活動等について講演いただきました。パネルディスカッションでは、学生、企業、行政等の関係者が、それぞれの実践事例を発表するとともに、地域課題解決の糸口を探りました。

今回初めての試みとして動画部門等を設けたポスターセッション・動画コンテストでは、24 の作品が発表され、「エコスクール渋川小学校」が知事賞を、「守山高等学校 チームＦＥ３Ｃ」が、学長賞を受賞しました。また、ワークショップでは参加者が 17 の会場に分かれて、それぞれに設定されたテーマ毎に、課題解決や今後の新たな展開について熱心に意見交換を行いました。

ＳＤＧｓの地域化拠点を目指して

このほか、本学では、ＳＤＧｓの達成に向けて、様々な関連事業に取り組んでいます。

①地域教育プログラム

ＳＤＧｓの視点を踏まえ地域に貢献する人材を輩出するための様々な地域教育プログラムを実施しています。例えば、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの単位互換科目として県内の大学生がＳＤＧｓを学ぶ集中プログラム「ＳＤＧｓと滋賀のグローカルイノベーション ～近江の暮らしとなりわい～」を本学の提供科目として実施しています。

②近江楽座（Ｅプロジェクト）

地域貢献を目的とする本学独自の学生主体の活動「近江楽座」においてＳＤＧｓ推進枠（Ｅプロジェクト）を設け、関連するプロジェクトを支援しています。

③ＳＤＧｓ特化型地域課題研究

ＳＤＧｓの視点に基づく地域課題の解決に向けた研究に取り組み、地域と連携した研究成果を発信する「ＳＤＧｓ特化型地域課題研究」を実施しています。

④ＳＤＧｓシネマ

映画を通じてＳＤＧｓに係る理解を深めるとともに、参加者同士で交流する「ＳＤＧｓシネマ」を毎月実施しています。

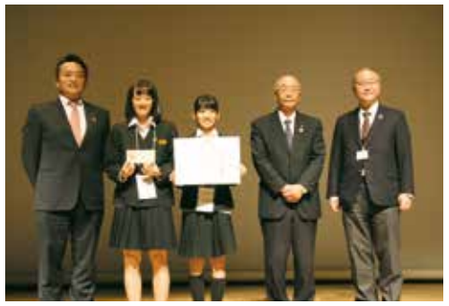
⑤ＳＤＧｓ連続講座等

ＳＤＧｓの視点を持って地域の中心となって活躍する人材を育成する「ＳＤＧｓ連続講座」を開催しています。

このほか、地方自治体、企業等のＳＤＧｓの取組の普及、拡大を支援するため出前講座や、笑いを通してＳＤＧｓを自分ゴトとして考える「ＳＤＧｓ落語」等を実施しています。

※ＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標））は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された国際目標で、滋賀県においても様々な取組が進められています。

参加者の集合写真



知事賞を受賞した「エコスクール渋川小学校」

滋賀県立大学 公式Instagramページを開設しました
[アカウント] @univ_shigapref
[URL] https://www.instagram.com/univ_shigapref/

- - - - - - - - - -

受賞・表彰（学年は受賞時点）

学生

工学研究科 材料科学専攻 博士前期課程　前田　麻美（1 年）
2019 年度「日本ゴム協会年次大会」　優秀ポスター賞
2019 年度「プラスチック成形加工学会年次大会」
優秀学生ポスター賞

人間文化学部 国際コミュニケーション学科　森　美咲（2 年）
日本英語模擬国連 (JEMUN)2019　Best Delegate

人間文化学部 国際コミュニケーション学科　白土　晴香（3 年）
日本英語模擬国連 (JEMUN)2019　Best SNS Journalist

環境科学研究科 環境動態学専攻 博士前期課程　辻　一真（2 年）
日本陸水学会第 84 回金沢大会　優秀口頭発表賞（未来開拓枠）

人間文化学部 生活デザイン学科
安食　あなん・金森　文音・川端　あい・長澤　慶季（2 年）
100 年文具への道　入賞

環境科学研究科 環境計画学専攻 博士前期課程
寺山　友香（1 年）
2019 年度日本造園学会関西支部大会研究・事例発表
関西支部賞

環境科学部 環境建築デザイン学科　上田　健太郎（4 年）
2019 年度日本造園学会関西支部大会研究・事例発表
関西支部賞

工学研究科 電子システム工学専攻 博士前期課程
木村　山紫郎（2 年）
16th International SoC Design Conference (ISOCC2019)
Best Paper Awards「IEEE SSCS Seoul Chapter Award」

工学研究科 電子システム工学専攻 博士前期課程
市井　裕大（1 年）
16th International SoC Design Conference (ISOCC2019)
Best Paper Awards「ZINITIX Award」

工学研究科 材料科学専攻 博士前期課程
竹島　さゆり（2 年）
第 68 回高分子討論会　優秀ポスター賞

工学研究科 材料科学専攻 博士前期課程　森村　光稀（2 年）
第 68 回高分子討論会　優秀ポスター賞

工学研究科 材料科学専攻 博士前期課程　黒瀬　直也（2 年）
2019 年度「レオロジー討論会」 優秀ポスター賞

近江環人地域再生学座　新村　佳嗣（社会人受講生）
日本計画行政学会第 42 回全国大会　優秀発表賞

人間文化学部 生活デザイン学科　石黒　加奈子（3 年）
第 1 回滋賀ぎゅっとおみやげコンテスト　最優秀賞

- - - - - - - - - -

団体

吹奏楽部
第 55 回滋賀県吹奏楽コンクール　金賞

- - - - - - - - - -

教員

人間文化学部 地域文化学科　准教授　武田　俊輔
日本生活学会第 46 回研究発表大会　第 5 回日本生活学会博士論文賞

人間文化学部 生活栄養学科　教授　辰巳　佐和子
第 4 回滋賀テックプラングランプリ　企業賞

工学部 材料科学科　教授　徳満　勝久
マテリアルライフ学会　論文賞

人間文化学部 国際コミュニケーション学科
講師　橋本　周子
アントニー・ロレ記念食文化史学術出版賞

人間文化学部 生活デザイン学科　講師　佐々木　一泰
JID AWARD 2019　NEXTAGE 部門 部門賞
第 38 回ディスプレイ産業賞　奨励賞

環境科学部 生物資源管理学科　教授　泉　泰弘
第 17 回日本作物学会　論文賞

人間文化学部 生活デザイン学科　教授　森下　あおい
2019 年度日本デザイン学会年間論文賞

- - - - - - - - - -

研究室

環境科学部 環境建築デザイン学科　村上修一研究室
第 21 回まちづくり・都市デザイン競技　まちづくり月間実行委員会会長賞

- - - - - - - - - -

人事

2019 年 9 月 27 日　着任

加藤　恵里
環境科学部
講師